

近世ハンガリーにおいて新聞記事に掲載された 日本に関するニュース

サボー・ノエミ (SZABÓ Noémi)

本稿は 1820 年以前のハンガリーの新聞に掲載された、日本に関するニュースについて分析することを目的としている。日本とハンガリーとの公式な関係は、1869 年の日墺修好通商航海条約 (Freundschafts-, Handels- und Schiffahrtsvertrages zwischen Österreich-Ungarn und Japan) によって始まるが、それ以前の状況の考察を試みたい。それにあたって、まず、当該期の新聞記事情報の収集方法と、ヨーロッパと日本の関係の始まりや鎖国時代⁽¹⁾の情報源 (資料) について確認し、つづいて収集しえた新聞情報を地理や文化、宗教、国際関係、日本の特産品のカテゴリーに分けて概観し、最後にそれらが意味するところについて考察する。

ハンガリーと日本の関係は、特に 1869 年に日本とオーストリア＝ハンガリー二重帝国との間で日墺修好通商航海条約が締結されて以来、活発になった。したがって、ハンガリー・日本関係史の研究も、この時期について盛んに行われている。代表的なものとしては、例えばファルカシュ・イルヂコー (Farkas Ildikó)、セルダヘイ・イシュトヴァーン (Szerdahelyi István)、ヴィンテルマンテル・ペーテル (Wintermantel Péter)、梅村裕子、近藤正憲の研究があげられる⁽²⁾。このように、日墺修好通商航海条約および締結以後のハンガリーと日本の関係史は、一定の研究を生み出す史料環境があった。

これに比して、条約以前の史料は非常に少ない。この時期、例えばハンガリーメディアは、冒険家であるモーリツ・ベニョヴスキー (Benyovszky Móric) が日本を訪問したことについてほとんど報じなかったが、モーリツ・ベニョヴスキーは鎖国の時代に確実に日本へ行っている。彼の旅については、キライー・アティラ (Király Attila) が論文を書いている⁽³⁾。

中世には独立していたハンガリーは、18・19 世紀にはハプスブルク帝国の一部となったため、当時のハンガリーの新聞記事は全てドイツ語とラテン語で書かれていた。しかし、18 世紀末になると、ハンガリー語で書かれた新聞も発行され始めた。従って、以前より多くの市民が遠く離れた異国、例えば、日本についてハンガリー語で読めるようになった⁽⁴⁾。

記者たちが日本に行くことは不可能だった日墺修好通商航海条約以前、とりわけ日本が鎖国をしていた時期に、新聞はハンガリー語で、日本についてどのような情報を掲載したのだろうか。そして、記者たちはその情報をどうやって手に入れたのだろうか。前者については、二次的な情報源に依存せざるをえなかったと考えられる。これらの問題について考えてみよう。そのための方法と視覚を、2 点指摘しておこう。

第一に方法について。まず、ハンガリーの ADT⁽⁵⁾というデータベースで当時の新聞記事などの資料の収集を行った。また、20 世紀半ば頃以降に出版された資料集も参考にした⁽⁶⁾。これらを読み進めておく上で、以下の 2 点にはとくに留意が必要である。第一に、日本語の言葉のローマ字表記は、記事によって異なる上、記

(1) 鎖国の語は日本では見直しの研究動向があることは承知しているが、ヨーロッパの学界では引き続き使用されていることも事実である。このような現状に鑑みて本稿では鎖国の語を使用する。

(2) Farkas Ildikó – Szerdahelyi István – Umemura Yuko – Wintermantel Péter (ed.): *Tanulmányok a magyar-japán kapcsolatok történetéből*, Budapest, ELTE Eötvös kiadó, 2009.

(3) Király Attila: „A japán Benyovszky-kutatás”, in Farkas Ildikó – Szerdahelyi István – Umemura Yuko – Wintermantel Péter (ed.): *Tanulmányok a magyar-japán kapcsolatok történetéből*, Budapest, ELTE Eötvös Kiadó, 2009, 9-26.

(4) Szabolcsi Miklós (chief ed.): *A magyar sajtó története I. 1705-1848*, Budapest, Akadémiai Kiadó, 1979-1985. <http://mek.oszk.hu/04700/04727/html/30.html> (last access 2022.05.23.)

(5) Arcanum Digitális Tudománytár: <https://adt.arcanum.com/hu/> (last access 2022.05.23.)

(6) Lévai Gábor: *Japán magyar könyvészete*, Budapest, Egyetemi Keletázsiai Intézet 1943., と Buda Attila: *Messziről felmerülő, vonzó szigetek I. II/1, II/2., III.*, Budapest, Ráció Kiadó, 2010-2015.

者の身分も不明であり、様々な問題点がある。例をあげると、日本は「Nippon」、「Nihon」、「Japan」、「Japon」、「Dsapan」、京都は「Meakum」、九州は「Ximum」、四国は「Xicocum」などと書かれている。

第二に視覚について。訪日経験はないものの、ヨーロッパで日本について最初に情報を知らせたのはマルコ・ポーロであった。西洋人と日本人との最初の接近は1543年のポルトガル人の来日であり、以後、スペイン人、イギリス人、オランダ人がつづいた。しかしその後、江戸幕府が成立し、幕府が鎖国を行ってからは、日本との貿易を許されていたのは、中国とオランダのみだった。それで、オランダが日本の情報（品物や知識）を直接西洋に輸出した。従って、近世ヨーロッパの新聞に掲載された日本のニュースは、オランダ人を通じて紹介されたものや、「Christian Century」ともよばれる16・17世紀に来日した宣教師が集めた情報に依拠したものだった。鎖国時代にはオランダ以外のヨーロッパの国々が日本と関係を作ろうとした事例も見受けられるものの（例えばクルーゼンシュテルンの世界周航⁽⁷⁾、ゴローニン事件⁽⁸⁾）、1853年まで誰もできなかった。ただ、海難で生き残った人たちからも日本の情報が届けられた。当該期のハンガリーもこれらのヨーロッパ諸国と類似した環境にあったと理解される。

このような性格をもつ日本に関する新聞記事を、以下において地理、文化、宗教、国際関係、日本の特産品の5のカテゴリーに分け、年代順に並べ概観していきたい。

1. 地理

日本の地理についての情報が様々な記事に見られる。例えば、「ロシアの隣の国である」⁽⁹⁾、「中国に近い（簡単に行ける）」⁽¹⁰⁾、「アジアの島（列島）の一つ」⁽¹¹⁾などがある。また、Sokfëleという新聞の表に、ウィーンから世界の有名な都市までどのくらいの距離があるかについて記されていた。そしてウィーンの昼12時時点の世界の各地の都市の時刻も記載された。その記事には京都の時刻は午後8時10分で、人口は40万人と書かれていた⁽¹²⁾。人口に関するデータが正確であるとみなされる⁽¹³⁾。

2. 文化

1783年に出版されたMagyar Könyv-házという書物において、モルナル・ヤーノシュ（Molnár János）が16世紀の宣教師ピエトロ・マッフェイ（Pietro Maffei）の本を参考にし日本について次のように書いている⁽¹⁴⁾。

日本は島国で3つの大きな島とさまざまな小さい島からなっている。寒い国であり、山がたくさんあり、「火をだす山」もある。文字はエジプト語と中国語の書き方に似ている。食べるときには、箸を使う。部屋も服も道具もきれいである。客を座ったまま親切に歓迎する。挨拶の時に靴をぬぐ。葡萄がないから、酒を米から作る。しかし酒より茶が人気である。古いものも好き、高い値段で売買している。言語は同じだが、地方的な差が大きく、性別によっても日本語の使い方が異なっている。刀はヨーロッパの鉄を切る。日本人は頭がよく、知識も豊富であり、蛮的な民族ではない⁽¹⁵⁾。

1800年に出版されたMagyar Könyv-házでは、ヨハン・フリードリッヒ・フリッツ（Johann Friedrich

(7) Krusenstern, Adam Johann von: *Reise um die Welt in den Jahren 1803, 1804, 1805 und 1806 auf Befehl Seiner Kaiserlichen Majestät Alexander des Ersten auf den Schiffen Nadeshta und Newa unter dem Commando des Capitains von der Kaiserlichen Marine A. J. von Krusenstren*, vol. 1-3., St. Petersburg, Schnoorschen Buchdruckerey, 1810-1812.

(8) Golovnin, Vasilii Mikhailovich: *Memoirs of a captivity in Japan, during the years 1811, 1812 and 1813 with Observations on the country and the people*, (english edition) London, Henry Colburn and Co., 1824.

(9) Molnár János: *Magyar Könyv-ház*, vol. 2., Pozsony, Landerer Mihály, 1783, 11.

(10) Molnár János: *Magyar Könyv-ház*, vol. 3., 1783, 153.

(11) Decsy Sámuel: *Magyar Almanak*, vol. 1., Bécs, Schrämbel Ferentz Antal, 1794, 71.

(12) Sándor István: *Sokféle. Időszakosan megjelenő tudományos és ismeretterjesztő szemle*, vol. 2., Győr, Streibig József betűível, 1791, 140-141.

(13) Totman, Conrad: *Japán története*, Antóni Csaba (trans.), Budapest, Osiris kiadó, 2006, 343-344.

(14) Molnár: *Magyar Könyv-ház*, vol. 3., 1783, 584-591.

(15) Molnár: *Magyar Könyv-ház*, vol. 3., 1783, 585-587.

Fritz) とベンジャミン・シュルツェ (Benjamin Schultze) の 1748 年の本「*Orientalisch- und occidentalischer Sprachmeister*」⁽¹⁶⁾の紹介があり、その中に日本語の少しおかしいアルファベットも記されている⁽¹⁷⁾。

Tudományos Gyűjtemény 所属のあるエッセイ作家は、1817 年に国の文化に天気と食文化の影響がみられると主張している。主に植物を食べる民族、つまり日本人は主に肉を食べる民族に比べて、あまり力強くなく、勇気のある民族ではないが、やさしくて静かで、人の気持ちを敏感に感じ取る、頭がいい人だとされている。そして、この作家は雑食が一番良いとも主張している⁽¹⁸⁾。

3. 宗教

宗教のカテゴリーで新聞に掲載された記事は、さらに二つのカテゴリーにわけることができる。一つ目はキリスト教会に関するテーマや 16・17 世紀の宣教師と殉教者、二つ目は日本の宗教、神道と仏教である。ここでは前者に関する記事を紹介する。

宣教師が書いた書物をもとに、1801 年にモルナル・ヤーノシュは、フランシスコ・ザビエル後の時期の日本のキリスト教会と宣教師の仕事、そして日本の僧侶と宣教師の間にあった葛藤について書いている。例えば宣教師は仏教があつてはならない宗教と考えて、僧侶はキリスト教徒が人間を食べると主張した⁽¹⁹⁾。

1807 年の Magyar Kurir という新聞で、ドイツの新聞記事に基づいた面白いニュースが掲載された。オリジナルのドイツ語の記事は何を参考に書かれたか不明だが、それは「中国の皇帝がクリスチャンになって、日本の天皇ももうすぐクリスチャンなる可能性が高いと考えられます。」という不思議な内容のものであった⁽²⁰⁾。

4. 国際関係

4.1. 日露関係

1783 年に出版された Magyar Könyv-ház では、1729 年にカムチャツカ半島の近くで遭難した日本人について書かれた。生き残ったふたりがサンクトペテルブルクに連れていかれ、ロシア語を勉強し、洗礼を受け、日本語を教えたというものである⁽²¹⁾。テオフィル・ジークフリート・バイヤー (Theophil Siegfried Bayer) が彼らと出会い、日本の文字を記録した。この文字が、先ほど紹介した 1748 年に出版された「*Orientalisch- und occidentalischer Sprachmeister*」に見られる⁽²²⁾。

逆の出来事を書いた記事もあった。例えば、1739 年にロシア人が天気が悪かったため、日本人に助けもなかったという内容のものである⁽²³⁾。

19 世紀初期の Magyar Kurir でアーダム・ヨハン・フォン・クルーゼンシュテルンの世界周航についても書かれた。この世界周航の目的の一つは日本との貿易関係を作ることだが、最終的には実現しなかった⁽²⁴⁾。

(16) Fritz, Johann Friedrich – Schultze, Benjamin: *Orientalisch- und occidentalischer Sprachmeister;: welcher nicht allein hundert Alphabete nebst ihrer Aussprache, so bey denen meisten europäisch- asiatisch- africanisch- und americanischen Völkern und Nationen gebräuchlich sind;: auch einigen Tabulis Polyglottis verschiedener Sprachen und Zahlen vor Augen leget;: sondern auch das Gebet des Herrn, in 200 Sprachen und Mund-Arten mit derselben Characteren und Lesung, nach einer geographischen Ordnung mittheilet*, Leipzig, Christian Friedrich Geßner Verlag, 1748, 134-135.

(17) Molnár: *Magyar Könyv-ház*, vol. 13., 1800, 315.

(18) „A Nemzeti Culturáról közönségesen s a Magyar Nemzet Culturájáról különösen”, *Tudományos Gyűjtemény*, vol. I., 1817, no. 1, 30-37.

(19) Molnár: *Magyar Könyv-ház*, vol. 14., 1801, 103-113.

(20) *Magyar Kurir*, vol. XXI., no. 14, 1807.02.17., 220.

(21) Molnár: *Magyar Könyv-ház*, vol. 1, 1783, 65-66.

(22) Osterkamp, Sven: „The Japanese studies of Andreas Muller (1630-1694)”, 京都大学言語学研究 *Kyoto University Linguistic Research*, vol. 29., 2010, 97-98. https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/141806/1/kulr29_077.pdf (last access 2022.05.25.)

(23) Molnár: *Magyar Könyv-ház*, vol. 1, 1783, 65-66.

(24) *Magyar Kurir*, vol. XVII., no. 21., 1803.09.09., 336; no. 23., 1803.09.16., 359.; vol. XVIII., no. 20., 1804.09.07., 311.; vol. XIX., no. 16., 1805.08.23., 253.; vol. XX., no. 6., 1806.01.21., 87.

Hazai's *Külföldi Tudósítások* という新聞の1814年の記事のなかに、ゴローニン事件に関する記事を見出すこともできる。新聞は1811年に捕まったゴローニンらの解放に関する交渉は大成だったと伝えている⁽²⁵⁾。

4.2. 日英関係

1802年に出版された *Magyar Kurir* は、これまでオランダとしか貿易をしなかった日本が、ようやくイギリスとも貿易関係を結んだと述べた。この記事は、イギリスとの貿易関係が成立した理由について、ポルトガル人との悪い経験を忘れたか、あるいは「頭がよくなった」からだと伝えている⁽²⁶⁾。ナポレオン戦争（1799～1815）時に、イギリスはオランダの植民地を奪い取ろうとした。つまり出島を取る可能性も確実にあったことが、日英関係が成立したと報じられた背景にあると考えられる。しかし、奪取は実現しなかった⁽²⁷⁾。

4.3. 日蘭関係

1796年の *Magyar Almanach* によると、ヨーロッパ人の中でオランダ人だけが日本と貿易が許された。ポルトガルの宣教師が日本人を迫害したため、国籍に関係なく、すべてのクリスチャンの日本での活動が禁止された。その中でオランダ人だけが貿易を許されたことについて、それは彼らが「クリスチャンではなくて、ただのオランダ人だったからだ。」とオランダ人の言い分を伝えている⁽²⁸⁾。

4.4. 日本とハンガリーの関係

本稿の冒頭で触れたベニョヴスキーについて、若干の情報を *Magyar Hírmondó* で確認できる。しかしそれは彼の本の紹介に過ぎなかった⁽²⁹⁾。また、1794年に出版された *Magyar Könyv-ház* の記事によれば、ベニョヴスキーが日本を離れた祭に「フォルモサ」として知られた台湾を経て南へ旅をしたそうである⁽³⁰⁾。日本とハンガリーの関係に関する情報は、以上に尽きている。

5. ヨーロッパで知られている日本の特産品

これらのヨーロッパ諸国との関係に加え、ヨーロッパで知られている日本の特産品や植物、特に焼き物の一種である磁器「ポーセリン」とつばきについての情報を、時折見出せることは特筆に値する⁽³¹⁾。

まとめに

本研究で得られた成果については、次のようにまとめることができる。

18世紀後半から1820年前までの時期に、ハンガリーの新聞で日本についての多様な記事が掲載されていたことを確認した。そして、それらの記事における、日本に関する幅広いトピックの分析を行った。管見の限り、日本に関する情報量は必ずしも多くはなかった。しかし、触れられていた内容は様々であって、日本と直接の接触が困難な時代のなかで、概して正しい情報が書かれていたと言ってもいいだろう。他方で、日本が遠く離れた国であったり、情報入手の方法などのために、少しおかしい情報も混入していた。

具体的なトピックとしては、日本列島、文化、鎖国の理由やその影響、外交関係樹立への希望、日本の独特さなどについて報じられていた。文化のカテゴリーの記事ではポジティブな方向性で、主に宗教についての記

(25) Hazai's *Külföldi Tudósítások*, no. 16., 1814.08.24., 124.

(26) *Magyar Kurir*, vol. XVI., no. 31., 1802.10.15., 486.

(27) Eckel, Paul E.: „Challenges to Dutch Monopoly of Japanese Trade During the Wars of Napoleon”, *The Far Eastern Quarterly*, vol.1., no. 2., Association for Asian Studies, 1942, 173-179. <https://www.jstor.org/stable/2049620> (last access 2022.05.25.)

(28) Decsy: *Magyar Almanak*, vol. 3., 52.

(29) *Magyar Hírmondó*, no. 51., 1793.12.24., 910.

(30) Molnár: *Magyar Könyv-ház*, vol. 6., 1794, 176.

(31) Szabó Noémi: „Japán a korai magyar sajtóban”, in Farkas Ildikó – Sági, Attila (ed.): *Kortárs Japanológia III.*, Budapest, Károli Gáspár Református Egyetem - L'Harmattan Kiadó, 2019, 89-90.

事では、ネガティブな方向性で報じられていた。

日本に関する初期イメージは、新聞記事によって、鎖国の間にすでにある程度ハンガリーにも伝わっていた。日墺修好通商航海条約が締結され、両者の間に公式な関係が樹立されることを俟つまでもなく、一般のハンガリーの読者は、新聞記事から日本についての知識を得ることができたのである。

参考文献

一次資料

新聞

Arcanum Digitális Tudománytár: <https://adt.arcanum.com/hu/> (last access 2022.05.23.)

DECSY Sámuel: *Magyar Almanak*, vol. 1-3., Bécs, Schrämbl Ferentz Antal, 1794-1796.

Hazai's Külföldi Tudósítások, Pest, 1806-1848.

Magyar Hirmondó, Bécs, 1792-1801.

Magyar Kurir, Bécs, 1788-1834

MOLNÁR János: *Magyar Könyv-ház*, Pozsony, Pest, Landerer Mihály, Trattner Mátyás, 1783-1804.

SÁNDOR István: *Sokféle. Időszakosan megjelenő tudományos és ismeretterjesztő szemle*, Győr, Bécs, Streibig József betűivel, Pichler Antal Betűivel, 1791-1808.

Tudományos Gyűjtemény, Pest, 1817-1841

文献

BUDA Attila: *Messziről felmerülő, vonzó szigetek I. II/1, II/2., III.*, Budapest, Ráció Kiadó, 2010-2015.

FRITZ, Johann Friedrich – SCHULTZE, Benjamin: *Orientalisch- und occidentalischer Sprachmeister; welcher nicht allein hundert Alphabete nebst ihrer Aussprache, so bey denen meisten europäisch- asiatisch- africanisch- und americanischen Völkern und Nationen gebräuchlich sind; auch einigen Tabulis Polyglottis verschiedener Sprachen und Zahlen vor Augen leget; sondern auch das Gebet des Herrn, in 200 Sprachen und Mund-Arten mit dererselben Characteren und Lesung, nach einer geographischen Ordnung mittheilet*, Leipzig, Christian Friedrich Geßner Verlag, 1748.

GOLOVNIN, Vasilii Mikhailovich: *Memoirs of a captivity in Japan, during the years 1811, 1812 and 1813 with Observations on the country and the people*, London, Henry Colburn and Co., 1824.

KRUSENSTERN, Adam Johann von: *Reise um die Welt in den Jahren 1803, 1804, 1805 und 1806 auf Befehl Seiner Kaiserlichen Majestät Alexander des Ersten auf den Schiffen Nadeshta und Newa unter dem Commando des Capitains von der Kaiserlichen Marine A. J. von Krusenstren*, vol 1-3., St. Petersburg, Schnoorschen Buchdruckerey, 1810-1812.

LÉVAI Gábor: *Japán magyar könyvészete*, Budapest, Egyetemi Keletászai Intézet 1943.

二次資料

ECKEL, Paul E.: „Challenges to Dutch Monopoly of Japanese Trade During the Wars of Napoleon”, *The Far Eastern Quarterly*, vol. 1., No. 2., Association for Asian Studies, 1942, 173-179. <https://www.jstor.org/stable/2049620> (last access 2022.05.25.)

FARKAS Ildikó – SZERDAHELYI István – UMEMURA Yuko – WINTERMANTEL Péter (ed.): *Tanulmányok a magyar-japán kapcsolatok történetéből*, Budapest, ELTE Eötvös kiadó, 2009.

KIRÁLY Attila: „A japán Benyovszky-kutatás”, in Farkas Ildikó – Szerdahelyi István – Umemura Yuko – Wintermantel Péter (ed.): *Tanulmányok a magyar-japán kapcsolatok történetéből*, Budapest, ELTE Eötvös Kiadó, 2009, 9-26.

SZABOLCSI Miklós (chief ed.): *A magyar sajtó története I. 1705-1848*, Budapest, Akadémiai Kiadó, 1979-1985. <http://mek.oszk.hu/04700/04727/html/30.html> (last access 2022.05.23.)

SZABÓ Noémi: „Japán a korai magyar sajtóban”, in Farkas Ildikó – Sági, Attila (ed.): *Kortárs Japanológia III.*, Budapest, Károli Gáspár Református Egyetem - L'Harmattan Kiadó, 2019, 73 - 92.

OSTERKAMP, Sven: „The Japanese studies of Andreas Muller (1630-1694)”, *京都大学言語学研究 Kyoto University Linguistic Research*, vol. 29., 2010, 77-151., https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/141806/1/kulr29_077.pdf (last access 2022.05.25.)

TOTMAN, Conrad: *Japán története*, Antóni Csaba (trans.), Budapest, Osiris kiadó, 2006.